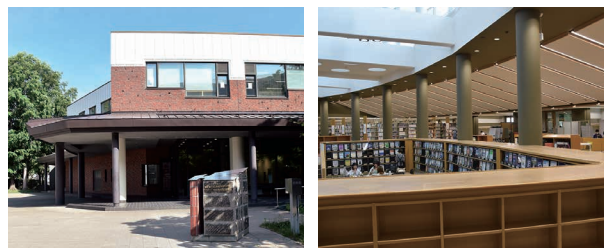


学校法人北海道科学大学創立100周年記念会館HUS+H(ハッシュ)

4月にリニューアルオープンした学校法人北海道科学大学創立100周年記念会館HUS+H(ハッシュ)。本学の学生のほか、この春から前田キャンパスに移転してきた北海道科学大学高等学校の生徒が放課後に自主学習スペースとして活用している姿も数多くみられます。個人での学習はもちろん、グループ学習や教職員のミーティング、様々なシーンで活用できるスペースが充実しています。

学生からも「キレイで明るい雰囲気になって前より利用しやすくなった」と好評です。学生・生徒だけではなく、地域に開かれた場所として、みなさまのお越しをお待ちしています。



2023年6月8日に学内公開講座をHUS+Hで開催

法人創立100周年記念事業寄付金ご協力のお願い

2024年に予定している法人創立100周年記念事業では、本法人が今後目指す「次の100年」を社会に発信するべく、多くの方の想いが反映されるよう諸事業の展開を計画しています。つきましては、諸事ご多端の折、誠に恐縮に存じますが、寄付の趣旨にご賛同いただき、卒業生、保護者、地域社会の皆様からのご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。2023年6月30日現在で、累計124,702,000円の寄付を賜っております。

応募期間	2025年 3月31日まで	応募の対象	個人の方 「一般有志・卒業生・保護者・教職員」 一口につき5千円	法人の方 「企業・団体」 一口につき5千円
------	------------------	-------	--	-----------------------------

寄付の詳細につきましては、法人創立100周年記念事業寄付金サイトにてご確認ください。

法人創立100周年記念事業寄付金サイト > <https://ed.hus.ac.jp/100th/donation/>

こちらからも
ご確認いただけます



HUS NEWS LETTER

Vol.41 / Hokkaido University of Science

北海道科学大学 HUS NEWS LETTER 2023年7月25日(第218号)

01 SPECIAL FEATURE.1 特集1 HUSオープニングフェス



HUS OPENING FES

HUSオープニングフェス
開催レポート



03 SPECIAL FEATURE.2 特集2 チーム医療合同授業



05 学生の活躍



07 研究室から



09 卒業生訪問



10 学生記者



法人創立
100周年記念事業HUS
OPENING
FES^{4.8}_{sat}

HUSオープニングフェス

HUSオープニングフェスでは、高校の新校舎、HUS+H、E棟の3会場に、「科学を楽しむチャレンジ工房」や「サイエンスワークショップ」といった体験コーナー、「バレーボール教室」「キャンパスツアー」「研究者パネル展」「ステージパフォーマンス」などのコンテンツを用意。中でも「サイエンスワークショップ」が人気を集め、事前の申し込みに300名の定員を超える応募があり、抽選に当選された方々がスーパーボールやパスボム作りなど、本学の学びから生まれた体験にチャレンジしました。

ほかにも高校の新校舎に誕生したLINKSホールで行った「ステージパフォーマンス」、体育館での「バレーボール教室」にもたくさんの人に参加いただき、特にプロ選手からの

バレーボール指導に子どもたちは目を輝かせ、選手がプレイするたびに大きな拍手と歓声が上がっていました。

また、E棟ではタレントで実業家の杉村太蔵氏をお招きした特別講演会を実施。ご自身の政治家としての経験や実業家としての知見を面白おかしく語る巧みな話術で聴講者を引き込みながら、地域活性化や北海道科学大学に寄せる思いを熱く語っていただきました。

当初は雨予報の1日でしたが、幸運にも終了間際まで雨が降ることなく進められたHUSオープニングフェス。手稲区をはじめ、多くの地域の皆さまに会場いただき、本学の学びと新しくなったキャンパスに親しんでいただきました。

学校法人北海道科学大学は、北海道科学大学高校の手稲区移転と「100周年記念会館 HUS+H」の誕生に合わせ、オープニングイベントを4月8日(土)に開催しました。地域住民をはじめ、たくさんの方々に訪れていただいた新キャンパスでの特別な1日をご紹介します。

バレーボール紅白戦
バレーボール教室

紅白戦後の教室では、2023-24シーズンよりVリーグに参入するアルテミス北海道の選手が子どもたちを指導。奥山優奈選手を司会に、見本を見せながらスパイクやサーブの種類やコツをアドバイスしました。

ステージパフォーマンス

本学卒業生の兄弟音楽ユニットSE-NO、高校合唱部が未来への希望が詰まった曲を披露し、ラストは大学のYOSAKOIソーラン部相羅が演舞。優秀賞の実績を持つ熱いパフォーマンスで観客を魅了しました。



科学を楽しむチャレンジ工房

義肢装具学科の教員とともに、キツツキに見立てたおもちゃで実験しました。プラスチックに重さの違う分銅を載せたり、載せる位置を検証したり、創意工夫をしながら繊維強化プラスチックの性質を学びました。



サイエンスワークショップ

北前船の歴史が学べるボードゲームや、ストローを使って建物の模型を作るストロー建築など学内のワークショップを一同に集め、子どもから大人まで、多くの地域住民の方々に楽しんでいただきました。



稚内市出身の本学卒業生兄弟ユニット SE-NO

Profile 兄・エピナマスジ、弟・蝦名摩守俊による音楽デュオ。本学を卒業後、札幌と稚内を拠点に20年以上にわたって活動し、これまで中西圭三、林田健司ともライブで共演。幅広い層から人気を集めている。

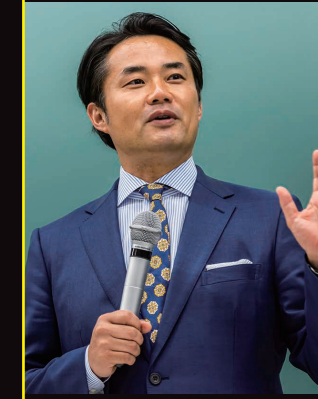
HUS
オープニング
フェス

特別講演

杉村太蔵氏が地方活性化の定義、
社会に必要な学びを熱くトーク！

シン・地方創生

— 地域と大学のシナジーについて —



今後、人生100年時代が本格化する中で「80歳まで社会に必要とされる人材にならなくてはいけない」と語る杉村氏。だからこそ学び直しの機会が必要であり、「そのためには大学の存在が大きくなる」と予想します。さらに自身が手掛ける商業施設「旭川はれて」を例に、活性化の定義を紹介。北海道科学大学には「インプットだけでなく、学生がアウトプットする力を育む環境をつくってほしい」と提案しました。

キャンパスツアー

研究者パネル展

図書館利用大登録会

短編映画上映会

その他イベント

保健医療学部×薬学部 全学生323人で学ぶ チーム医療

保健医療学部はチーム医療論

薬学部はアドバンスト演習「チーム医療演習」

として受講しました。

本学の保健医療学部では、チーム医療を学ぶ場として「チーム医療論」という授業を設定し、他職種がそれぞれ果たす役割や繋がりなどを学び理解することを目的に、これまでは看護学科、理学療法学科、診療放射線学科の1年生の必修科目として展開してきました。今年度からは臨床に活きるさらなる学びと経験を積めるようカリキュラムを刷新。看護学科、理学療法学科、診療放射線学科は必修科目、義肢装具学科、臨床工学科は選択科目とし、保健医療学部5学科の学生が学ぶ科目となりました。また、実施時期も臨床実習を経験し、知識と技術が高まった4年生に進級する前の春休みのタイミングに変更しました。さらに学部の垣根を越え、薬学部薬学科5年生も6年生の必修科目アドバンスト演習の「チーム医療演習」として参加。医療系の全学科が合同で行う、より実践的な授業へと生まれ変わりました。

> 課題.1

3か月後の退院を目指している糖尿病の患者像と目標をチーム全員で把握・共有した上で、各医療職が患者の治療、検査、評価、ケア、リハビリテーション、支援することは何かを考えてください。また、多職種でどのような連携・協働を図っていくのかも考えてください。

> 課題.2

患者は退院後に夫婦でドライブ旅行に行きたいと希望しています。それを実現するために、どのような支援をするよいかを医療的視点と福祉・社会的視点から考えてください。また、可能であれば実現可能な旅行プランも提示してください。

3月22日・24日の2日間にわたって行われた授業は、実際のチーム医療と同じようにグループワークで展開。

学ぶ分野が異なる学生たちがワンチームとなって、2つの課題に挑戦しました。話し合いは指定された患者モデルを全員で共有することから始まり、それぞれの職種でどのような対応を行うのか、お互いにどのような連携・協働を図っていくのかを議論。最後にチームごとにまとめた内容を発表し合いました。



A. グループワークは看護学科、理学療法学科、臨床工学科、診療放射線学科、薬学科の5学科の学生1〜2名ずつで1つの医療チームを結成。

B. 義肢装具学科の学生は義肢装具製作所を想定した別チームとして展開。各医療チームを巡り、義肢装具の知見を伝え、アドバイスをを行いました。

C. 話し合いと発表は各チーム内で司会、書記、発表者、タイムキーパーなどの役割を決めて進行されていきました。

D. プレゼンテーション発表後には、別チームからの質問も。リハビリの根拠の確認など、同じ分野を学ぶ学生ならではの鋭い質問もあり、発表した学生が真摯に答える場面もありました。

授業を終えた学生たちに聞きました！



薬学科

鬼丸 倫さん

薬について想像以上に頼られてうれしかったです。中でも多く学んできた薬効や作用機序より、作用時間や患者の状態に最適な薬の選択が重視されることは勉強になりました。

薬学科

藤井 野乃加さん

みんなで一致団結して、1つの目標に向かって取り組めたのが楽しかったです。薬剤師は薬の専門家。聞かれたらすぐに答えられるよう、もっと知識を身につけたいと感じました。

看護学科

中川 玲奈さん

臨床工学技士と診療放射線技師の業務や役割が理解できたのが大きな収穫でした。誰にどんなことが聞けるのかが分かり、複数の視点から物事を見ることの大切さも実感しました。

看護学科

沼倉 未祐さん

看護師は患者と最も近い存在であり、チーム医療では看護師が中心となってコミュニケーションを図ることが重要だと知りました。卒業後の臨床現場でも積極的に話し合っていきたいです。

理学療法学科

桑名 遥さん

他の職種を知ることで視点が広がるだけでなく、症例に対する理解も深まりました。おかげで今回の課題ではリハビリや治療の計画をより具体的に立てることができました。

義肢装具学科

清水 拓実さん

義肢装具士を知らない人が多くいたことにビックリしました。存在を知ってもらえる良い機会になったと思いますが、義足の重要性までは伝えきれなかったのが少しだけ残念です。

臨床工学科

伊藤 大雅さん

チーム医療は複数の専門職が連携することで、さまざまな困難に対応できます。自分も他の職種を知り、臨床工学技士ができること、できないことが整理できたように思います。

臨床工学科

片山 豊暁さん

職種によって優先すべきことに違いがあったことは新鮮な驚きでした。グループワークを通して、臨床工学技士には機器の知識や理解が求められるということも強く実感しました。

診療放射線学科

高嶋 雅己さん

職種が違うと言語も認識も異なることがあると知り、意思疎通の難しさを感じました。円滑な医療を提供するためにもチーム医療は不可欠。この経験を今後につなげていきたいです。

チーム医療演習の狙いと今後について
保健医療学部長の宮坂智哉先生に聞きました。

本授業の目的は2つあり、ひとつは自分の担当職種を説明して理解してもらい、自分自身も他の職種を理解すること。もうひとつは、一人の患者モデルに対して、どのような治療、検査、支援、リハビリをしたら良いのかを多職種で話し合い、共通のゴールイメージを設定できるようにすることです。チーム医療の演習は他大学でも行われていますが、本学では義肢装具学科が医療チームに属さず、実際の現場と同じように製作所というポジションで関わり、臨床工学技士や診療放射線技師といった病院内で完結する職種の学生も医療チームに参加して退院後の生活について一緒に考えていきます。そうした規模の大きさ、関わりの深さは、2学部6学科を有する本学ならではの特徴であり、全国的にも珍しい、他にはできないところだと自負しています。学生たちにはここでの気づきや経験を、臨床の現場で大いに生かしていってほしいと願っています。



保健医療学部
理学療法学科
宮坂 智哉 教授

宮坂先生自身の研究もP07で紹介しています。ぜひご覧ください。

Student Activity 学生の活躍



科学研究部の活動は、部員の「やってみたい」から始まる

私は1年生の後期から3年生の後期まで部長を務めていました。高校までは生徒会や、部活動の部長として活動していたので、その経験を生かし、オープンキャンパスへの参加申請や先生方との打ち合わせのほか、部員からの要望をもとに実験の下準備を行っていました。

実験の内容は、自由です。例えば、アロマせっけんを作りたいという部員の要望から、プロの講師にも協力いただいて学内ワークショップを開催することがあります。そのときは、マルセイユせっけんと苛性ソーダを泡立て器で2時間以上混ぜ続け、みんなで悲鳴を上げました(笑)。色や香りもつけてキレイに仕上がり、大学祭での展示も好評でした。残念ながら、苛性ソーダが劇物扱いであること、またせっけん(化粧品)の販売には許可が必要となるため販売することはできませんでしたが、部員たちと楽しく作ることができ、良い思い出になりました。

私も含め数名の女子部員で提案したUVレジンアクセサリー作りは、今ではワークショップのプログラムの一つになっています。液状の樹脂にUVライトを当てると光重合反応が起きて固まるという性質を利用したもので、小さな型に入れた樹脂の中に花などを閉じ込めてオリジナルのアクセサリーを作る工程や、固化する原理を紙芝居にまとめ、披露しています。

このように、科学研究部の活動は部員の「やってみたい」からスタートします。自分が提案したものでなくても、一緒に実験をしてみると興味が出てくると多く、仲間とやる意義を感じます。また、どのような実験も初心者にも伝わるレベルまでひもといっていくので、いろいろなイベントに出向いてお披露目できたらと思っています。コロナ禍の規制が緩和され、活動の機会が増えていくことが、今からとても楽しみです。

仲間が増えれば、活動の幅も広がるはず。興味のある方は、ぜひ科学研究部へ!

薬学部 薬学科 4年生
前部長 神垣 遥香
さん



科学研究部

← Science Research Department →

学内外のイベントに出展し、
私たちが作る実験プログラムを通して
地域の方々に科学の面白さを伝えたい!

実験に参加した子どもたちの素直な反応がとってもうれしい!

科学研究部では、部員が興味のある実験をやったり、オープンキャンパスや学外のイベントに出展して市民の方々と一緒に科学実験を行ったりしています。イベントの開催時期に合わせて活動することが多く、部員同士でアイデアを出し合い、どうすれば科学に関する知識がない人でも楽しく参加でき

るか、試行錯誤しながらプログラムを作っていきます。過去のイベントでは、酸化還元反応の実験や、UVレジンアクセサリーなどの制作体験を行いました。中でも、「血液はなぜ赤い?」という実験は好評で、科学研究部の十八番になっています。2種類の透明の液体を混ぜると鮮やかな色がつくという不思議な現象をきっかけに、科学に興味を持ってもらえたらと思っています。

最近は札幌市外のイベントにも呼んでいただく機会が増えていて、旭川市科学館サイバルで開催された「わくわくサイエンス」でこの実験を行ったことがあります。小さな子どもたちの「なんで?」「すごい!」という反応がとってもうれしかったです。専門用語を使わずに伝える難しさはありますが、皆さんに楽しんでもらえるプログラムをどんどん増やしていきたいです。



人気の実験! 「血液はなぜ赤い?」

赤血球に含まれるヘモグロビンが赤色素の「ヘム」を持っているため血液が赤くなるという原理を知ることができます。

二価鉄イオン、三価鉄イオン、銅イオンの水溶液を用意。

マイクロピペットに透明の呈色試薬をとる。

二価鉄イオン水溶液に呈色試薬を入れると、水溶液が赤色に発色!

学内
ニュース HUS
CAMPUS
NEWS

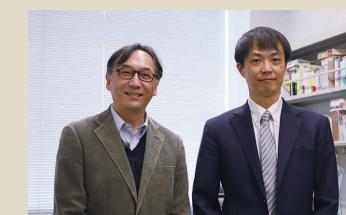
学生団体Q-PITが構築した「空き教室なび」の実稼働がスタートしました!



詳しくは
こちらをご覧ください



電気電子工学科 村口准教授が「半導体」についてSTVどさんこワイド179の取材を受けた様子が放送されました!



詳しくは
こちらをご覧ください



DATA [部 長] 薬学部 薬学科 2年生/小野 瑚雪さん
[部員数] 60人 [発 足] 2006年



都市環境学科学生による 「グラウンドまもり隊」が 今年も活動を始めました



詳しくは
こちらをご覧ください



機械工学科の松下隆起さんが オートバイの全日本選手権に 参戦します



詳しくは
こちらをご覧ください



ChatGPTについて 北海道科学大学 川上学長と 学生が、だんこワイド179から 取材を受けました



詳しくは
こちらをご覧ください



使ってもらってなんぼ！ 研究開発で大切にしている のは、利用者の視点を持つこと。

――先生はどのような研究をされているのですか？

高齢者や障がい者の支援に関する研究をしており、現在は大きく2つのテーマを扱っています。一つは「自力で避難できない方の、介助を含めた避難方法の提示」、もう一つは「プライバシーに配慮した高齢者の見守り方法の提示」。どちらもハードウェアを作る企業などと連携して研究開発を進めています。

進めるうえで大切にしているのは、ユーザーの視点。理学療法士としての臨床経験があるので、現場を離れ研究者として医療に携わるようになって、介助する側・される側の視点は忘れずに、本当に使う人のためになるものを作りたいと考えています。せっかく開発しても、使ってもらえなければ意味がないと考えています。



介助する側とされる側。当事者の心に

寄り添う、真にユーザーが求める研究を。

産学官の連携で、車椅子に乗っ たまま階段を降りることが できる避難器具を開発！

――避難方法の研究に関しては、先生が開発に携わった「車椅子用階段避難車」が2019年に商品化されていますよね。開発はどのように進められたのですか？

札幌市消防局と、階段避難車の製作実績を持つ埼玉県の企業との共同開発でした。2年という限られた時間でしたが、既存の「人が直接乗り込む」階段避難車ではなく、「人が乗った状態の車椅子に装着する」階段避難車を完成させることができました。この階段避難車を使えば、標準型車椅子に乗った人を1分以内に一つの階まで避難させることができます。火災時の避難を想定しているので、操作にかかる時間をどれだけ短縮できるかが大きな課題でした。加えて、高齢者施設での使用を想定し、介助者1名でも操作できるようにしました。産学官の共同研究で開発をしましたが、企業のものづくりの技術がなければ、短期間でここまでものを作ることはできなかったと思います。いろいろな人が連携することで、開発の目標を達成することができました。



保健医療学部 理学療法学科
Miyasaka Tomoya

宮坂 智哉 教授

――現場の声を先生だからその視点も取り入れられているんですね。この研究のきっかけも、ユーザーの声だったのでしょうか？

ユーザーとは少し違うのですが、消防庁に勤める友人との会話がきっかけでした。「高齢者施設で火災が起きたときに、利用者を避難させる方法は確立されているのか」と問われ、すぐに答えることができませんでした。特に、当直の人数が少ない夜間に火事になったとき、一度に多くの利用者を避難させることは大変難しいです。そこで限られたスタッフで、少しでも多くの人を避難させるにはどうしたら良いか？と研究を始めることになりました。

その友人が札幌市へ調査に訪れた際に、札幌市消防局消防科学研究所の担当者とお話する機会がありました。札幌市では2010年に高齢者施設で火災が発生し、7名が犠牲になったこともあり、消防科学研究所も独自で車椅子での避難方法を模索していました。試作品を作るところまではできていましたが、避難時に実用的に使えるものにするには課題を残していました。そこで、私との共同研究として消防庁に予算を申請し、避難器具の開発を本格的にスタートさせることになりました。



――やはり現場の方の思いがヒントになるんですね。

そうですね。福祉用具やリハビリテーションに関する研究は、最先端の技術を追い求めるというよりは、先端技術をいかに当事者にフィットさせるかという二次的な研究が多くなります。「この人にとってより良いものを」と考えるので、おのずとニーズ中心になりますね。

――「車椅子用階段避難車」の今後の展開は？

現在は、より多くの規格の車椅子に装着できるよう、開発元の企業が改良を進めています。私は次



のテーマとして、上の階への避難を想定した器具の開発を本学の教員と取り組んでいます。津波や水害の発生で、建物の上階に逃げなければいけない場面を想定しています。建物から出て高台を目指すのか、建物の上の階を目指すのか、状況を見て判断しなければいけないのが水害避難の難しさです。そこで、避難器具はもちろんです、避難方法をアドバイスしてくれるAIシステムなども開発できたらと考えています。

――そんなシステムがあれば、介助者の方も落着いて行動できそうですね。もう一つのテーマ、「高齢者の見守りシステム」についても教えてください。

こちらは、熱画像センサを用いて高齢者や障がい者の生活を見守り、転倒などの危険があれば外部に通報するシステムです。ビデオカメラなどで行われる場合も多いですが、ご本人からすれば、いつも誰かに見られている感覚は、心理的負担が大きいものです。プライバシーを守りつつ、命を守る。そのために人の顔や肌の露出は分りにくく、動

作や姿勢は検知しやすい熱画像センサを使っています。

――こちらも、人の気持ちを中心にですね。

はい。これは学生にも伝えているのですが、医療者として大切なのは「当事者感」を持つことだと思います。困っている患者さんや利用者さんが何を考え、何を求めているのかを察知して、その人のためにできることを考える。研究や開発においても、その視点は同じだと思います。

どちらの研究も、社会やユーザーに求められる限り続いていくと思います。医療機関や福祉施設の管理部門で働いている卒業生も多くいます。その結びつきも活かしながら、実際に使ってもらえるように研究・開発を進めていきたいですね。

GRADUATE VISIT 卒業生訪問

先輩の大学時代と ← → これからを聞く

助産師を志したのは、
実習で初めて目にした出産に
心を動かされたから。

入学当初は、まさか自分が助産師になるなんて夢にも思っていませんでした。看護師だった母の影響もあり、看護師を目指して北科大へ進学しましたが、看護学科の必修科目「母性看護学実習」でお産を見学し、人生が変わりました。必死に出産に臨む妊婦さんの姿、母子二つの命を預かる助産師さんの仕事を目の当たりにしたときの感動は、今でも鮮明に覚えています。私もこの場所で患者さんを支えたいと、助産師になることを決意しました。それからは看護師資格の取得と助産学専攻科への進学のため、ほとんどの時間を勉強に費やしました。実習での感動が大きな原動力となり、大変な道のりを乗り越えることができました。



幅広い知識が求められる現場。
北科大で身につけた基礎的な
看護技術が仕事の基盤に。

赤ちゃんを取り上げる以外にも、妊婦健診の診療補助や保健指導、入院患者のケア、出産後の育児指導など、助産師の仕事は多岐にわたります。勤務している病院には合併症等のリスクを持つ患者さんが多く、産科以外の病気に関する知識も必要です。在学中に成人看護学を学んでいたことが、現在の仕事に役立っていると感じます。



助産師として、一人の人間として。
人生の分岐点に立ち会い、
答えのない問いに向き合う仕事。

妊娠を手放しに祝福できないケースもあります。周囲のサポートが受けられなかったり、母体の健康状態によって妊娠継続が難しい場合など、医療的観点から「産み育てるのは危険」と判断することもあります。お母さんの産みたい気持ちと赤ちゃんの命を守る最善の選択は何か…医師・看護師・助産師がチームで個々のケースに応じた最良の選択を考えていきます。助産師が妊婦さんの相談に乗ることもあり、日々自身の人間的成長を実感しています。

妊娠・出産にける想いは千差万別。
妊婦さんに寄り添いサポートする
頼りになる
助産師を目指したい。

仕事をするうえで大切にしているのは、接する方の性格や特性、来院までの経緯を把握することです。不妊治療や流産を繰り返しやっと妊娠継続できている妊婦さんや、養子に出す予定の妊婦さん、NICU（新生児集中治療室）に通うお母さん。さまざまな事情を抱えた妊婦さんに、どのように寄り添うことができるのかを常に考えています。

これまで関わった中で印象深いのは、コロナ禍でお父さんの立ち会いが叶わず、一人で出産に臨んだお母さん。お産の時間が長引いたこともあり、不安が大きい様子でした。帝王切開に切り替えてもいいと諦めのような気持ちも浮かんだそうですが、無事に経産分娩で出産。「助産師さんがずっとそばで励ましてくれたから産むことができた」と言われた時は、とても嬉しく思いました。こうした女性や家族にとって大切な



北海道大学病院 周産母子センター
産科/助産師

ささき なつ
佐々木 奈都 さん

Profile

むかわ町出身。2018年3月に北科大 保健医療学部 看護学科を卒業後、札幌医科大学 助産学専攻科へ進学。助産師資格を取得し、2019年4月より北海道大学病院にて助産師として勤務。

ライフイベントに携われることが、この仕事のやりがいです。

今後は助産領域だけでなく、産後ケアや不妊治療など幅広く女性をサポートできるよう知識を身につけていきたいと考えています。2つの国家試験に挑んだときのように、難しいと思えることでも「やりたい」という強い意志があれば実現できるはず。学生のみならず、憧れや目標があるなら臆することなく挑戦してほしいと思います。



このページは
学生記者が担当します！

タイトルとロゴを
決めました！

今年5月、「学生記者」の活動がスタートしました。“北科大の今を、学生の目線で伝える”をコンセプトに、次号から私たちが作る特集記事が掲載されます！記事の題材選びから、取材、原稿づくりまで、全て私たちのオリジナル。校舎の建築デザイン、ユニークな授業、ユニークな先生(!?)、学内で働く方々、本学マスコットキャラクターなどがガオーの活動…北科大には、意識しないと気づかない、でも知ると面白いネタがたくさんあるので、構想は膨らむばかりです。

さて本号では、私たちの最初の仕事、記事タイトルとロゴの制作についてご紹介します。メンバーで話し合いを重ね、タイトルは「HUS調査隊」に決定！学生ならではの視点で大学のさまざまなことを調査し、魅力を発信していきたいという想いを込めました。

たくさんの人の目に届くのが今からとても楽しみです。学生記者の「HUS調査隊」、ご期待ください！

HUS
調査隊



未来デザイン学部
メディアデザイン学科 3年
平間 海人さん

毎日通っていても、大学について知らないことはたくさん。

「HUS調査隊」のロゴデザインを担当しました。私たちの記事が、隠れた魅力に気づききっかけになればうれしいです。



未来デザイン学部
メディアデザイン学科 3年
蔵前 萌那さん



未来デザイン学部
メディアデザイン学科 3年
北村 悠葵さん

普段はお話する機会のない方にも取材したいです。

大学生生活を陰で支えてくれている人にも焦点を当てたいと思います！



未来デザイン学部
メディアデザイン学科 1年
鈴木 菜友さん

企画作りから携われるのが楽しみです。

人に伝わりやすい表現方法を身につけられるよう、先輩方と一緒に頑張ります！